

リュウゼツランの開花記録

信太千帆・濱谷修一

フクリンリュウゼツラン (*Agave americana* var. *marginata* リュウゼツラン科) が、本園で初めて開花したので報告する。この株は、1972年サボテン温室完成時に植栽されたもので、主たる展開部分の樹齢は、30～40年程度と思われる。

4月初旬、ロゼット型の葉の中心から太い円柱状の花茎を伸ばし始めた。4月15日の時点で花茎は約3mまで伸びていた(写真1)。



写真1. 伸び始めた花茎 (4月15日)

6月初旬に黄色味を帯びた緑色のつぼみが確認できた。6月10日の時点で伸びた花茎はサボテン温室の天井(8m)に達しそうになったため、花茎を少しずつ引っ張りながら斜めに倒す



写真2. 花茎が傾いた様子



写真3. 花

作業を何度か行った(写真2)。そのためか、8月中旬には半分以上根元が浮くまでになったが、サボテン温室の水路すれすれまで倒すことになった。倒れた花茎を起こすため、サボテン温室の天窓からロープを下ろし、上から吊るようにして起こした。

7月中旬、花茎の下位節にある花房から咲き始め、次第に上位節にあるものが開花した(写真3)。最上位の花房が咲き終ったのは8月上旬だった。開花時に人工交配等の作業は行わなかったが、子房の肥大は確認された。開花中、ハエの類が訪花していたが、それが関与していたかは不明である。10月下旬に肥大した果実を採取し、切って中身を確認したところ、多数の種子が入っていたが、いずれも「しいな」だった(写真4)。1994年に開花したファイリ



写真4. 果実



写真5. 開花後の地上茎を切ったもの (12月13日)



写真6. 切り倒した時の花茎の様子 (12月13日)

ウスバリウゼツでは、開花後の花茎上に多数の子株の生育が観察されたが、本株では花茎上の子株は観察されなかった。

12月中旬に枯れこんだ部分を除去した。地上茎（ロゼット部分）と花茎の長さを測定したところ、地上茎は1 m 30cm（写真5）、花茎は8 m 30cmあった（写真6）。花茎上部3 mの部分からは22房の

花房が出ており、1房に平均50個の花が見られた。この時、根茎部から3個の吸芽が観察された。最大のもので葉が1 m展開していた。

参考文献

横山裕彦 1995. リュウゼツラン属 (*Agave*) の開花について。広島市植物公園栽培記録 16:1-2



巨大カボチャの栽培について

名和田潔

第一回サマーフェア・平成19年7月14日（土）～9月16日（日）の期間中、‘巨大’をテーマに飼料用カボチャ（品種名：アトランチック・ジャイアント）の栽培に取り組んだ。

準備作業

栽培場所は大温室前のワシントンヤシモドキの樹間とした。土づくりのため、2月上旬50 cm程度の深さまで耕し、15 m²当たり牛ふん32 kg、鶏ふん30 kg、油かす20 kg、バーク堆肥100 kg、腐葉土20 kgをすき込んだ。

4月上旬、15 m²当たり苦土石灰を3 kg、植え付けの数日前に基肥として有機入り粒状複合ペレックス(8-8-8-1)を3 kg施用した。（同時に安佐動物公園の動物のふんと敷きわらを堆肥化したものをすき込み、ここで育てた巨大カボチャをアフリカゾウに食べさせるという企画も計画した。）

育苗はガラス温室内の温床で、2/18播種、4/15本葉5～6枚の苗を2株植え付け、4月下旬まで寒さよけのためにビニールで被覆した。（3/18播種、5/3植え付けも2株あり）

栽培管理・生育状況

活着後、親づるを摘心して子づるが4～5本伸びだした頃、生育のよい子づるを2本にしてそれぞれ20節以降に交配・着果させ、その後1果に制限した。追肥として5/27に液肥を、6/26、7/11にペレックスを1株当たり250 g施用した。

薬剤散布は、5/13、5/23、6/5、6/30、7/5の5回行った。6/14入梅後、雨が少なく蒸し暑い日が続いたため、株元の老化葉にうどんこ病が発生し、その部分のみ切除した。7月以降、葉裏にオンシツコナジラミの

発生が目立つこともあった。炎天下、果実が高温になり腐敗することも考えられたので、日よけのために一番大きな果実にパラソルを設置した。

着果後は急激に肥大を始め、盛期には直径が1日当たり2 cmずつ増加し、7/16には直径58 cmになった。果実が大きくなるにつれてつるを持ち上げて裂ける恐れがあるため、早めに果実の元のつるを持ち上げて余裕をもたせておいた。

また、7月以降は人工交配しなくても着果し始めた。1番果の肥大が停止したと思われたので、さらに1果着果させ、それも直径40 cm以上に肥大した。果皮は生育中クリーム色だが、成熟すると朱色のきれいな色になった。

入園者への対応

サマーフェア期間中、常時3～4個のカボチャを植栽展示することができた。2週間おきにカボチャの直径を計測し、その数値を計測日とともにパネル表示して入園者に知らせた。更に直接果実を触られるように通路近くにも着果させた。つるつるした表面をなでたり、カボチャといっしょに記念撮影する入園者も多く、巨大カボチャを十分アピールすることができた。

安佐動物公園ではナイトサファリ・オープニング企画として、8/11（土）、8/12（日）の両日、本園提供の巨大カボチャ（直径47 cm、重さ30 kg）をアフリカゾウに食べさせた。牙を使ってカボチャを持ち上げ、落として割れたカボチャを食べ始め、試食は好評だった。

課題

‘巨大’がテーマなので、とにかく大きく作る事が一番である。遺伝的に素質のよい種子を使わなければ超巨大果は望めないが、市販品種でもそれなりにアピールできる大きさになるので、まず株づくりであり、そのためには土づくりが重要である。さら